

文化 芸術

SILK国内初発表

発電所美で
角永和夫 かいこ5万匹で新作

5万匹の「かいこ」を使った新作「SILK」No. 3「ABC」(2006年、いずれも800×400×4センチ) 富山県入善町の発電所美術館で

米国を中心に発表を続ける角永和夫の個展が実現した。絹作品「No. 3 ABC」は、逆光を通して見ると、無数の繭の楕円(だえん)が不規則に散らばっている。上に向かう性質を利用して、枠を回転させながら調節したが、はいた糸の量の違いで面に濃淡ができた。蚕農家が育てた約五万匹の「かいこ」を載せ、網を間に繭を運ばしめた。十月初めに、五万の命が閉じ込められた作品と考えると、たかいこ丸太を薄くスライスした日で糸をはり、熱した竹が割れる音を聞き、網の上を落下させ巨大な塊を作った。絹の面が出たりと、物質の持つ性質を生かした造形を提示してきた角永だが、展覧会の依頼があった時「この場所、この美術館でしかできない表現を考えた。細かく仕切った木枠に繭を仕込んだ。『幻の作品』は、十年前は熱処理を施した。しかし今回は「さなぎが繭を破ってガになり、外へ出てくるまでやってみる」。作品の変遷、その過程の最初から最後までをいつか美術館で見届けたいと機会を待っていたのだという。

会場での制作中はかいこが動く「カサカサ」という音が周りを包みこんでいたというが、まゆがほとんど音は聞こえない。途中で死んだ個体がいくらかあるにせよ、五万の命が閉じ込められた作品と考えると不思議な感慨がわいてくる。

十二月十七日まで。月曜と祝日の翌日休み。十一月三日午後にはドラムのワークショップ、二台のドラムによるライブなどのイベントがある。

(報道部・鈴木弘)



美術館の窓に対応して三つ並んで空中につられた作品「SILK」十年前は熱処理を施した。しかし今回は「さなぎが繭を破ってガになり、外へ出てくるまでやってみる」。作品の変遷、その過程の最初から最後までをいつか美術館で見届けたいと機会を待っていたのだという。